

P1-38-1 子宮頸癌合併妊娠の待機的取り扱い例の検討

岐阜大

牧野 弘, 小倉寛則, 水野智子, 早崎 容, 豊木 廣, 古井辰郎, 伊藤直樹, 森重健一郎

【目的】子宮頸癌合併妊娠において、診断確定後も経過観察を行った例について検討する【方法】当科で妊娠初期に子宮頸癌と診断され、患者の希望により待機的に妊娠管理され、生児を得たのちに治療された症例の妊娠管理、出産、その後の治療や経過を検討した。【成績】平成12年までに6例の該当症例を認めた。平均年齢は32.7歳で3例が初産婦であった。すべて妊娠初期の子宮頸部擦過細胞診で異常を指摘され、全例診断もしくは治療目的で子宮頸部円錐切除術を施行されていた。臨床進行期はIa期3例、Ib1期が3例で、SCCが3例、その他の組織型が3例だった。全例円錐切除術の際に子宮頸管縫縮術を施行されていた。5例が切迫早産の診断で入院、加療を要し、妊娠31週と35週に帝王切開分娩となったほかは正期産とであった。2例が経陰分娩であった。全例産後21日から101日の間に根治術もしくは子宮頸部円錐切除術が施行され、ほとんどが術後治療を要した。2例で再発を認めうち1例が原病死したが、ほかは5年以上無病生存の状態である。【結論】近年はガイドラインにのっとった治療が推奨されるが、貴重児を希望される患者においてはその危険性を十分説明のうえ待機的に妊娠管理を行うことも可能なのかもしれない。出産時期や出産方法も含め文献の考察をふまえ報告する。

P1-38-2 trachelectomy 後、2回目の妊娠管理を要した1症例

泉州広域母子医療センター・りんくう総合医療センター¹、市立貝塚病院²吉田 晋¹, 智多昌哉¹, 西川愛子¹, 高岡 幸¹, 徳川睦美¹, 後藤摩耶子¹, 佐藤 敦¹, 福井 温¹, 鹿戸佳代子¹, 荻田和秀¹, 横井 猛²

【緒言】子宮頸癌症例の生殖可能年齢女性での増加に伴い、妊孕性温存目的に広汎性子宮頸部摘出術が行われている。広汎性子宮頸部摘出術後の妊娠では、流早産や癒着による不妊症が増加するとの報告がある。今回、広汎性子宮頸部摘出術後2回目の自然妊娠で妊娠管理に難渋した症例を経験したので報告する。【症例】症例は38歳4回経妊2回経産。4年前に当科初診となり、生検でCarcinoma in situの診断であった。当科で円錐切除術を施行し、病理診断でsquamous cell carcinoma子宮頸癌Ib1であった。治療として広汎子宮全摘出術を提案したが、妊孕性温存を強く希望され広汎性子宮頸部摘出術を施行した。外来経過観察中に月経困難症を来しピル(OC)内服を開始し、ピル内服を中止後に1回目の妊娠が成立した。妊娠経過中は切迫早産徴候認めず妊娠38週に予定帝王切開施行となった。1回目の妊娠終了後、約11ヵ月後に2回目の妊娠が成立した。今回の妊娠では、妊娠24週ごろより切迫早産徴候を認め、約12週間の入院安静を要した。安静後は切迫早産徴候軽快するも、高度癒着が原因と思われる腹痛及び嘔気などの消化器症状が続いたが反復帝王切開施行し生児を得た。【結論】広汎性子宮頸部摘出術後の妊娠症例では、流早産の可能性や高度癒着による合併症があり、妊娠前からの十分な説明が必要と考えられた。

P1-38-3 悪性線維性組織球腫合併妊娠の1例

大分大

佐藤初美, 西田欣広, 矢野光剛, 竹林兼利, 山下聡子, 宮本侑子, 植原久司

【緒言】悪性線維性組織球腫合併妊娠の1例を経験したので報告する。【症例】35歳、1経妊未経産。妊娠4ヵ月前より右大腿前面に腫瘤を自覚していたが、病院の受診はしなかった。自然妊娠が成立し、妊婦健診を受けられていたが、大腿部腫瘤が徐々に増大するため、妊娠13週2日、MRI施行され、筋肉内血腫が疑われた。細胞診にて悪性所見はなかったが、妊娠19週3日に生検施行したところ、low gradeのsarcomaが疑われた。妊娠25週、整形外科受診し、妊娠中に腫瘤摘出術を施行し、術後の追加療法は分娩後に施行する方針となった。妊娠30週、整形外科でmarginal excision施行した。術後病理診断はmalignant fibrous histiocytomaであった。胎児の発育に問題はなく、妊娠35週でEFW 2,048g(-1.29SD)であり、major anomalyは認められなかった。病理結果より、悪性線維性組織球腫に対して早期の追加治療が必要と判断されたため、terminationの方針となり、妊娠36週2日、選択的帝王切開術施行した。児は2,222g, male, Apgar score 9/10, 臍動脈血pH 7.354であった。術後11日目の造影CTでは局所再発、遠隔転移認められなかった。術後18日目より、CDDP+ADM+CAF療法開始。3クール施行した後、追加広範切除術施行。術後にIFO+VP-16+CAF療法2クール施行し、外来follow中である。現在のところ、再発所見は認められていない。【結語】悪性線維性組織球腫合併妊娠の1例を経験した。悪性線維性組織球腫は成人の四肢軟部組織に好発する比較的稀な悪性腫瘍であり、妊娠合併例の報告は数例のみである。5年生存率は40~60%と予後の悪い悪性腫瘍であるが、本症例では帝王切開術後1年、再発なく経過している。